様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：１３８０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５９５

研究課題名（和文）How did speakers regulate space and time? Pragmatic development of the spatio-temporal systems

研究課題名（英文）How did speakers regulate space and time? Pragmatic development of the spatio-temporal systems

研究代表者
中安　美奈子（Nakayasu, Minako）

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：８０２１７９２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、歴史語用論の観点から歴史的なデータにおける時空間体系を体系的に分析し、その歴史的発展を分析する試みである。時制や人称代名詞といった時空間の要素がどのように使われたのかを分析することにより、こういった時空間の要素が相互にどのように関連しているのか、談話においてどのように展開するのか、そして、時空間の体系が歴史的にどのように変化したのかについて検討した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to make a systematic analysis of the development of spatio-temporal systems in English from the viewpoint of historical pragmatics. Investigating the use of elements of space and time such as tenses and pronouns, the present project provided an analysis of how these spatio-temporal elements are interrelated with each other, how their connections change in discourse, and how the spatio-temporal systems developed in history.

研究分野：人文学、言語学、英語学

キーワード：時空間体系　歴史語用論　歴史的発達　中英語　初期近代英語

１．研究開始当初の背景

我々の世界では様々な事象が数限りなく生起しており、その中から言語化する事象が選択される。話者はこういった事象が自分の領域からどの程度離れているのか、すなわち近いのか遠いのかを判断し、時空間の要素、すなわち代名詞、指示詞、副詞、時制、法助動詞などを用いることによって言語化している。また、このような要素は連携して近称または遠称のパースペクティブを構成したり、このパースペクティブが交替したりすることがある。要素の連携は空間の領域のみ、あるいは時間の領域のみで起こることもあれば、それらを統合した時空間の領域で起こることもある。ここで重要なことは、それまで時間の観点からのみ、空間の観点からのみで分析されてきた現象が、実は時空間体系という統合された大きな枠組みで捉えることができるということである。

研究代表者は、科学研究費の補助を受け、すでに中英語（1100 年頃-1500 年頃）の時空間体系に関する共時的なデータの分析、また、中英語から初期近代英語（1500 年頃-1700 年頃）にかけての時間体系に関する分析を行っている（Nakayasu 2014 など）。これらの分析結果をさらに精密化し、通時的な観点を導入することにより、さらに広い視座からの時空間体系の分析が可能となる。

英語の歴史において、話者はどのように時間と空間の体系を制御していたのだろうか。時空間の要素はどのように連携しているのか。この連携関係が談話においてどのように展開するのか。そして、時空間体系は歴史的にどのように発達してきたのだろうか。このような問いに答える形で、研究の目的を設定することとした。

２．研究の目的

本プロジェクトの目的は歴史語用論（historical pragmatics）の観点から、歴史的なデータにおける時空間体系（spatio-temporal systems）を体系的に分析し、その歴史的発展を分析することである。中英語と初期近代英語のデータを分析し、この時代の時空間体系がどのようなものであったのか、また、その歴史的な変化はどのようなものであったのかを検討した。

分析に当たっては、次の時空間の要素を対象とした。

（１）空間体系の要素
　代名詞、指示詞、空間の副詞（類）
（２）時間体系の要素
　時制（形式）、法助動詞、時間の副詞（類）
（３）時空間体系の要素（空間体系、時間体系両方に関わる要素）
　間投詞
（４）その他、関連する要素
　呼びかけ語、談話を組み立てる要素（メタディスコース、ディスコースマーカー）、命令法など

これら時空間の要素を２種類に、すなわち、話者の領域に近いものを近称（proximal）、遠いものを遠称（distal）に分類して、どちらの視点をとる傾向が強いのか、これらが連携してどのように近称または遠称のパースペクティブをとるのかを分析した。ただし、代名詞には中称（medial）があり、近称、中称、遠称の３つに分類することができるため、注意を要した。

３．研究の方法

本研究は、過去における言語使用やその歴史的発達、そしてその原理を研究課題とする歴史語用論の目的や方法論を採用した（Jucker and Taavitsainen 2015）。この分野においては、二つの対応づけ（マッピング）の方向が想定されている（Jacobs and Jucker 1995）。

（１）言語形式に着目してそれに対応する機能を分析する「形式－機能の対応づけ」
（２）機能に着目してそれに対応する言語形式を分析する「機能－形式の対応づけ」

本研究においては、この二方向の対応づけを採用した。代名詞などは形式からの対応が容易であるが、時制などは形式と機能が一致するとは限らないことから、このような場合には「機能－形式の対応づけ」を利用した。

また、時空間体系の分析を研究の目標とした点、対応づけを二方向にするという方法論を採用した点から、コーパスの範囲を絞って綿密な分析を行う必要があった。使用したコーパスは次のとおりである。

（１）*The Riverside Chaucer* (Benson 1987)
（２）*The Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*, Part I (Davis 2004[1971])
（３）*The Riverside Shakespeare* (Evans 1997)
（４）*Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English* (PPCME2) (Kroch and Taylor 2000)
（５）*Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME) (Kroch, Santorini and Diertani 2004)
（６）*The Socio-pragmatic Corpus* (Archer and Culpeper 2003)

なお、研究代表者は、国際学会参加などの機会を捉えて国内外の研究者との交流を行った。特にヤツェック・フィシャック教授（アダム・ミツケビッチ大学）から得られたレビューは大きな収穫であった。

４．研究成果

本研究プロジェクトは、歴史的なデータにおける時空間体系を体系的に分析した点において、これまでの研究代表者の研究同様、他に類を見ないものである。特に次の点において特に大きな意義があったと考えられる。

（１）歴史的なデータにおける時空間体系を初めて通時的な視点からとらえて分析したこと
（２）一見無関係に見えるいくつかの言語現象を一つの大きな現象としてとらえ直したこと
（３）歴史語用論の立場から時空間体系を理論的・実証的に分析したこと
（４）「形式－機能の対応づけ」「機能－形式の対応づけ」の 2 方向からアプローチしたこと
（５）いくつかの異なるレジスターの時空間体系を分析することによって、それぞれの特徴を浮かび上がらせたこと

次に本研究プロジェクトの顕著な成果をいくつか紹介しておきたい。

（１）チョーサーの時空間体系（中英語）

カンタベリー物語（The Canterbury Tales）（フィクション）とアストロラーベ論（Treatise on the Astrolabe）（ハンドブック）という二つのレジスターを比較しながら、時空間体系の分析を行った。アストロラーベ論は科学的なハンドブックであり、語り手が息子に語りかけるという形式をとっているため、近称の要素を用いることが多くなっている。また、中称（二人称）の代名詞や、相手の領域にあるものを指示する要素が多く使用されている。一方、カンタベリー物語は４つの階層からなる複雑な構造を持っており、過去の語りであるため、遠称の要素を使用することがわずかに多い。それだけでなく、聴き手を物語に引き込む様々な時空間の要素に関連した方策を使用している。談話においては、ダイナミックなパースペクティブの交替（特に時間の領域において）が観察される。

（２）パストン家書簡集の時空間体系（中英語）

パストン家書簡集（The Paston Letters）に集められている書簡を対象とし、書簡のやり取りを対話と見なして、その時空間体系の分析を行った。書き手のジェンダーに関して、男性の方が女性より近称の要素を使うことが多い。また、読み手が女性の場合は、近称の要素を多く使用する。読み手が目上の場合には、遠称の要素を使用する傾向がある。談話の分析では、近称あるいは遠称のパースペクティブを取りやすい典型的な文脈（例えば、妻の健康を気遣う夫の手紙では、近称）が浮かび上がった。

（３）メタディスコースの歴史的発達

メタディスコースは時空間に関連する要素の一つであり、テキストの命題に新しい要素を加えずに、すでにある命題を指示する機能を備えており、話者の領域と密接に関連している。本プロジェクトでは *That is to say* に着目し、その歴史的発達を追った。この表現は中英語期から初期近代英語期にかけて一旦増加し、初期近代英語期の後半でまた減少している。興味深いのは、中英語のみに現れる *This is to say* である。*That is to say* との区別がつかない例も多いが、直前に長い文脈を必要とし、同じテクスト内で前方照応的に使われているという点が特徴的である。この機能の変化は大変興味深い。

（４）シェイクスピアの時空間体系（初期近代英語）

シェイクスピアの戯曲を用いて時空間体系の分析を行った。大部分が対話形式であるため、代名詞や時制など、近称の要素が多いことに加えて、呼びかけ語など近称のパースペクティブの構成をサポートする要素も多く用いられている。法助動詞では SHALL、WILL（近称）が他の法助動詞に比べて頻繁に使用されており、これらが時制に近い意味機能を獲得していることの一つの証拠であると考えられる。この分析結果から自然に導き出されることであるが、談話の中では、近称のパースペクティブをとる例が遠称に比べて多い。また、近称と遠称のパースペクティブの交替に関しては、空間の領域、時間の領域、統合した時空間の領域の中での単純な交替に加えて、空間と時間の領域の間で近称と遠称のパースペクティブがクロスした複雑な交替など、様々なパターンが観察できる。

（５）裁判記録の時空間体系（初期近代英語）

椎名美智氏との共同研究に本研究プロジェクトの成果を生かすことができた。チャールズ一世の裁判記録を用いて、時空間体系の分析を行った。法廷でのやり取りは対面の形式をとるため、近称の要素が多く用いられ、呼びかけ語や命令法などが近称のパースペクティブをサポートする事例もしばしば観察される。また、ディスコースマーカーがパースペクティブを遠称から近称に交替させる事例や、チャールズ一世が判決を言い渡される直前には速いパースペクティブの交替が観察される。さらに、話者の役割の違いにより、使用する時空間の要素が異なることが明らかになった。最後に、法廷内の力関係の変化と時空間体系の関連性について指摘しておきたい。

５節に発表論文等のリストを掲げる。準備中の論考もあるため、今後も研究成果を社会に発信していく努力を続けていくつもりである。

本研究により、過去の話者たちがどのように時間と空間の体系を制御していたのか、時空間体系とその歴史的発達に関して重要な知見を得ることができた。しかしながら、歴史データにおける時空間体系の分析には、これまでに分析が叶わなかったレジスターの比較分析や、談話におけるパースペクティブの展開の詳細な分析など、さらに多くの興味深い課題が残されている。過去のコミュニケーションがどのようなものであったのか、時間と空間の織りなす世界から紐解いていきたい。

引用文献

Archer, Dawn and Jonathan Culpeper. 2003. “Sociopragmatic Annotation: New Directions and Possibilities in Historical Corpus Linguistics”. In: Andrew Wilson, Paul Rayson and Tony McEnery (eds.), *Corpus Linguistics by the Lune: A Festschrift for Geoffrey Leech*. Frankfurt am Main: Peter Lang: 37-59.

Benson, Larry D. (ed.) 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd edition. Boston: Houghton Mifflin Company.

Davis, Norman. 2004[1971]. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*, Part I. Oxford, etc.: The Early English Text Society/Oxford University Press.

Evans, G. Blakemore. (ed.) 1997. *The Riverside Shakespeare*. 2nd edition. Boston and New York: Houghton Mifflin Company.

Jacobs, Andreas and Andreas H. Jucker. 1995. “The Historical Perspective in Pragmatics”, in: Andreas H. Jucker (ed.), *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company: pp. 3-33.

Jucker, Andreas H. and Irma Taavitsainen. 2015. “Twenty Years of Historical Pragmatics: Origins, Developments and Changing Thought Styles”. *Journal of Historical Pragmatics* 16(1): 1-24.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani. 2004. *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME). <http://www.ling.upen.edu/hist-corpora/PPCEME-RELASE-2/index.html>

Kroch, Anthony and Ann Taylor. 2000. *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English* (PPCME2). 2nd edition. <http://www.ling.upenn.edu/hist-corpora/PPCME2-RELEASE-3/index.html>

Nakayasu, Minako. 2014. “Spatio-temporal Systems in Chaucer”. 18th International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL-18), KU Leuven, Leuven, Belgium.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

1. Nakayasu, Minako. 2018. “Space and Time in Middle English Letters: Dialogues between Men and Women”. *Kwartalnik Neofilologiczny* 65: 120-135. [Refereed]

2. Nakayasu, Minako. 2017. “Spatio-temporal Systems in Paston Letters”. *Studia Neophilologica* 89 (sup1): Interfacing Individuality and Collaboration in English Language Research World (edited by Merja Kytö, Jeremy J. Smith and Irma Taavitsainen): 75-89. [Refereed]
DOI: 10.1080/00393274.2017.1317020

3. Nakayasu, Minako. 2016. “*That Is to Say* or *This Is to Say*? A Note on Metadiscourse in the History of English”. *Studies in Modern English* 32: 87-95. [Refereed]

〔学会発表〕（計　８件）

1. Nakayasu, Minako and Michi Shiina. Forthcoming in 2018. “Spatio-temporal Systems in the Trial Record of King Charles I”. The 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE 2018), University of Tallinn, Tallinn, Estonia. [Refereed]

2. Nakayasu, Minako. 2017. “Spatio-temporal Systems in Shakespeare’s Dialogues: A Case from Julius Caesar”. The History of the English Language in Poznań (HEL-P 2017), Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland. [Refereed]

3. Nakayasu, Minako. 2017. “Spatio-temporal Systems in Middle English Letters: Discourse and Interaction. The 15th International Pragmatics Conference (IPrA2017), Belfast Waterfront Conference Centre, Belfast, Northern Ireland, UK. [Refereed]

4. Nakayasu. Minako. 2017. “How Did Paston Men and Women Regulate Space and Time? The Spatio-temporal Systems in Paston Letters”. The 10th International Conference on Middle English (ICOME 10), University of Stavanger, Stavanger, Norway. [Refereed]

5. Nakayasu. Minako. 2016. “Space and Time in Middle English Letters: Dialogues between Paston Men and Women”. CLASH (Culture, Literature, Anthropology, Sociology, History) Conference 2016, Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland. [Refereed]

6. Nakayasu. Minako. 2016. “Metadiscourse *That*/*This Is to Say*: Historical Change and Discourse”. The 4th Conference on the International Society for the Linguistics of English (ISLE-4), Adam Mickiewicz University, Poznań, Poland. [Refereed]

7. Nakayasu, Minako. 2016. “Spatio-temporal Systems in Paston Letters”. The IAUPE 2016 Triennial Conference, Univerisity of London, London, UK. [Refereed]

8. Nakayasu, Minako. 2015. “Spatio-temporal Systems in Margaret Paston’s Letters”. The 9th International Conference on Middle English (ICOME 9), Philological School of Higher Education, Wrocław, Poland. [Refereed]

〔図書〕（計　１件）
1. Nakayasu, Minako. Forthcoming in 2018. “Spatio-temporal Systems in Chaucer”. In: Peter Petré, Hubert Cuyckens and Frauke D’Hoedt (eds.), *Sociocultural Dimensions of Lexis and Text in the History of English* (Current Issues in Linguistic Theory 343), John Benjamins Publishing Company: pp. 125-150. [Refereed]

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
中安　美奈子（NAKAYASU MINAKO）
浜松医科大学・医学部・教授
研究者番号：80217926

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし